

III

日本の近代七宝 — 国内向け作品の成熟

明治末期になると海外での七宝の需要は減少し、七宝製作に携わる職人も次第に少なくなっていく。大正期から昭和前期にかけての七宝業界は、職人の技巧が最高度に洗練された明治期の海外向け七宝表現から一転して、どのように国内向けの需要に応える新しい作品を生み出すのかを模索した時期であったと言えよう。本展の出品作、林谷五郎《菊花形置時計》(no.22)や安藤重壽《籠に菊花文文房具》(no.27)のほか、《旭日鳳凰図衝立》(no.19)や《鳳凰文植木鉢》(no.20)など、花瓶や小箱以外の大小様々な器物へも七宝が応用されるようになったのである。



20
作者不詳
《鳳凰文植木鉢》
大正期～昭和初期
有線七宝・無線七宝

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

七宝工芸の近代

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 35

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社 印象社

翻訳 横溝廣子

発行 宮内庁

平成十六年七月三日発行

©2004, The Museum of the Imperial Collections